

平成24年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

『今の課題に向き合い、未来をよりよく生きる力を育てる』

～連携型小中一貫教育による児童・生徒の発達の段階に応じた

新領域の指導内容開発と指導方法の工夫に関する研究～

2 研究の概要

小中学校間の連携によって、児童生徒が、今の課題に向き合い、未来をよりよく生きる力を育てる。そのために、各教科等で、基礎・基本の知識・技能及び、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を培うとともに、社会参画力を育む中で、本校区がつけたい以下の4つの力を育成する。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① じりつする力＝自分で判断しながら自分の立ち位置を見つめる力 ② 考える力＝課題解決に向けて必要な情報を整理・活用する力 ③ 見通す力＝見通しをもって課題に取り組む力 ④ つながる力＝人や社会とつながりつづける力 |
|--|

そのために、次の研究に取り組む。

1. 「実生活 いまとみらい科」の開発
2. 「S - R P D C A」学習サイクル（学び方）の研究
3. 「実生活 いまとみらい科」と各教科等との関連の研究

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

①仮説と期待する効果

（児童生徒の実態）

- * 友だちと人間関係をうまく築けずに傷つき、傷つけている。
- * 急速に進む情報化社会の中で、情報に翻弄されている。
- * 学校で学んだことを自分の生活に生かせず、学ぶ意味を見いだせずにいる。
- * 未知なる経験や新しい問題に出会った際、どう解決をはかっていけばよいかわからず、最後までやり抜くことができない。
- * 厳しい社会状況、生活背景の中で、自分の将来を前向きに展望できずにいる。

上記のような児童生徒の実態等を踏まえ、学校はこれまでも、各教科等の時間等を通して、子どもたちに「生きる力」を育むアプローチをしてきた。しかし、学校で学んだことを自分の日常に生かす機会を十分に保障しきれなかった結果、「子どもたち自身が、学びが自分の生活をよりよくしていくことにつながると感じにくい状態にある」と考え、本校区では、このような状態を『学びの空洞化』と名付けた。

【学びの空洞化の要素】

①内容のずれ（知識・技能）

学校での学習が、子どもたちにとって学ぶ必然性を感じられる内容となっていない

②学び方のずれ（思考・判断・表現）

実社会をよりよく生きるための活用力を育むことを目的としながら、学習方法が効果的なものとなっていない

③気持ちのずれ（関心・意欲・態度）

自分に自信が持てず、学ぶ意欲が低下しており、総合的な学習の時間に行う探究的な活動に対して、主体的に取り組もうとする態度が十分に育っていない

《児童・生徒の実態》

①平成22年度 全国学力・学習状況調査「生徒質問紙」結果	小学校(全国)	中学校(全国)
「総合的な学習の時間」の勉強は好きですか(%)	76.0(78.5)	49.5(63.9)
「総合的な学習の時間」の授業で学習したことは、普段の生活や社会に出たときに役に立つと思いますか(%)	72.1(81.9)	67.1(65.2)
②平成22年度 学校教育自己診断「児童生徒用」結果	小学校	中学校
分かりやすく楽しい授業が多い(%)	78.4	53.5
学校では、自分の生き方や将来について考える機会がある(%)	73.0	77.7

※1. 対象:①は小学校6年・中学校3年、②は全校児童生徒

※2. 数値:「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の合計

※3. 小学校の数値は、2校の平均

「学びの空洞化」の大きな要素は上記の3点であり、学びの空洞を埋め課題解決を図るためには、現行の学習指導要領の枠を越えて、新しい学びの時間の創設が必要だと考えた。そこで、「総合的な学習の時間」と「キャリア教育」の視点、そして、年間35時間という枠では体系的にじっくり取り組みにくい「特別活動」の「学校づくりへの参画」という要素を生かし、「社会参画力の育成」というキーワードで9年間、そして校区3校を貫く学習が必要だと仮説を立てた。校区では、社会参画力を「社会の中から課題をとらえ解決する力」「人や社会に働きかける力」「矛盾や困難を乗り越え、自分の生き方に活かし続ける力」ととらえ、学校教育と子どもが生きる社会とをつなぐ、新領域「実生活 いまとみらい科」の開発と効果的な学習方法の研究を進めた。

「実生活 いまとみらい科」は、各教科等で身につけた知識や技能を活用し、現実の社会の中で直面する課題を解決するための知識・技能、思考力・判断力・表現力、そして社会参画力を育てていく時間とし、題材と学習方法の両方をもってアプローチすることを通じて、各教科等の学びの原動力として学習意欲を向上させ、今と未来をよりよく生きる力を育むことをねらいとする。

②具体的な取組

1. 「実生活 いまとみらい科」の開発

2. 学習方法(学習サイクル)の研究

効果的な学習サイクル「S-RPDC A」を研究する。この学習方法を成立させるには、とりわけ言語力の育成が必要である。

3. 「実生活 いまとみらい科」と各教科等との関連の研究

(2) 教育課程の特例

①「実生活 いまとみらい科」の設置

②「実生活 いまとみらい科」の学習指導要領(目標、内容等)、4・3・2制による指導計画及び評価の観点等の作成

③生活科・総合的な学習の時間の弾力的運用

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

「実生活 いまとみらい科」について

I ねらい 『今の課題に向き合い、未来をよりよく生きる力を育てる』

II 目標

子どもたちを取り巻く身近な社会(家庭, 学校), そして, これから子どもたちが踏み出す社会(地域・社会)で出会う可能性の高い課題を題材にして, (1)その課題を解決するために必要な知識・技能や, 思考力・判断力・表現力を育成し, (2)現在及び未来の自分や社会をよりよくしていくため, 主体的・自律的に取り組む力を養い, (3)様々な人と関わり, それぞれが自分の問題として行動できるように働きかけることができる力を育成する。

【前期】: (小学校第1学年～第4学年)

〈第1学年及び第2学年〉

- (1) 身近な社会に関わり, そのよさを知る。
- (2) 身近な問題について段階的に課題解決ができる。
- (3) 課題解決に向けて周りの人と協力して活動できる。
- (4) 身近な社会のよさを知り, 自分の生活や学級づくりに活かし続ける。

〈第3学年及び第4学年〉

- (1) 地域などのより広い社会に関わり, そのよさを知る。
- (2) より広い社会の問題について, 根拠に基づいて段階的に課題解決ができる。
- (3) 友だちや地域の人と協力しながら, 活動に関わり続けることができる。
- (4) 社会のよさや課題を知り, その解決に向け, 主体的に関わり続ける。

【中期】: (小学校第5学年及び第6学年, 中学校第1学年)

- (1) 自ら主体的に関わった社会のあり方を知る。
- (2) 課題解決に向けての道筋を考え, より広い問題の解決ができる。
- (3) 様々な人と協力しながら, 身近な課題解決に参画することができる。
- (4) 状況を整理して, 課題を明確にし, 自分の生き方に活かす。

【後期】: (中学校第2学年及び第3学年)

- (1) 課題解決を図りながら, 主体的に関わり続ける社会のあり方を知る。
- (2) 課題解決に主体的に取り組み, 自らの課題解決サイクルを確立する。
- (3) 様々な人と協力しながら, 社会の問題解決に参画し続けることができる。
- (4) 自分と距離のある課題からも学び, 将来の生き方に活かす。

III 内容

*子どもにとっての実生活を「家庭(命)」「学校」「地域・社会」というカテゴリーでとらえる。

*子どもたちが社会を生きるために向き合ってほしい題材, 直面している課題, 解決したいと感じていることを題材として扱う。

*家庭や学校など身近な社会を問い直す単元は「今を考える」内容と「未来を考える」内容を組み合わせて構成する。地域や社会を取り扱う場合, 具体的な活動をもって参画する単元を「今」, 未来を見据え発信していくことを主な活動とする単元を「未来」と位置づけて構成する。

*子どもたちが自分の立ち位置を意識できるように題材を配置, 導入に工夫する。

*発達段階に合わせた社会参画力の育成を図る。

A 家庭(命)に関すること…よりよい家庭生活を送るために、次の事項について指導する。

- (1) 家庭の中での自分の役割を考える。
- (2) 家族の一員として自分ができることを考え行動する力を養う。
- (3) 多様な家庭生活、生き方や価値観を知る。

B 学校に関すること…よりよい学級、学校づくりに参画するために、次の事項を指導する。

- (1) 学級、学校の中での自分の役割を考える。
- (2) 学級、学校の一員としての自覚をもち、役割を担う。
- (3) 学級、学校を支える様々な人の願いを知り、支えられていることを認識する。
- (4) 学級行事、学年行事、学校行事の企画、運営に携わり、改善を図る。

C 地域・社会に関すること…よりよい地域・社会づくりに参画するために、次の事項を指導する。

- (1) 地域・社会と自分との関わりを考える。
- (2) 地域・社会の一員としての自覚をもち、周りの様子や出来事に関心をもつ。
- (3) 地域・社会を支えるため、様々な人が活動していることを知り、自らその一員になることの大切さを知る。
- (4) よりよい地域・社会を築いていくために、解決すべき課題を見出し、課題解決に向けて企画し、行動する。

IV 指導方法・留意点

「実生活 いまとみらい科」では、各教科等で培った基礎・基本の知識・技能や活用力を土台として、社会で直面する課題を解決するための思考力や判断力、表現力、そして社会参画力を育てていく。

* 「S - R P D C A」を全学年、全単元共通の学習サイクルとする。

* 学習サイクルを何度も繰り返すことで、子どもたちに学ぶ意欲を育み、学び方を習得させる。

* 社会参画につながる活動を単元に入れることで、社会参画力を育む。

* 子どもたちが自分の立ち位置を意識できるように題材を配置し、導入を工夫する。

* 単元の終わりには、学んだことをもとに社会参画を踏まえた自分の「生き方」について考え、具体的な行動計画を決意とともに表明する。

* 各時間、各単元に、「ソロタイムⅠ（個）→コミュニケーションタイム（集団）→ソロタイムⅡ（個）」を効果的に配置し指導することによって、言語力の育成を図る。

* 自分で考えたことや気づいたことについての「話し合い活動」を通して、他者や社会とつながりながら、自分の考えを深める学習活動を設定する。

* 9年間で系統的に「聴く力・話す力・発信する力・質問する力」等を育成する。

* 学習サイクルに沿ったワークシートを活用することで、思考する際の手立てとする。

V 評価

「①知識・技能 ②思考・判断・表現 ③参画 ④関心・意欲・態度」の4つの観点で、子どもの発達の段階に即して観点の内容を設定する。

《評価の観点及びその趣旨》

知識・技能	思考・判断・表現	参画	関心・意欲・態度
・社会の仕組みについて理解することができる。 ・社会に関わる人の思いを知ることができる。 ・社会に関わることで社会を支え	・現状を分析し、課題に気づいている。 ・自分たちが取り組める課題について、解決方法を考え、目標や計画を立て、それに合わせて行動し	・意見の違いや立場の違いを理解し、自分の意見をわかりやすく伝えたり、相手の意見を丁寧に聞いたりしている。	・社会のルールや人との約束を自分で考え、判断し、守ろうとしている。 ・物事に進んで取り組もうとしている。

<p>ることが理解できる。</p>	<p>ている。</p>	<p>・困難に出会っても投げ出さずに取り組もうとしている。</p> <p>・学んだことにどのような意味があるのかとらえ、生き方に活かしている。</p>
-------------------	-------------	---

[前期]

《小学校第1学年及び第2学年の評価の観点の趣旨》

知識・技能	思考・判断・表現	参画	関心・意欲・態度
<p>・家庭や学級、地域のよさを理解している。</p> <p>・家庭や学級の課題を解決するための情報を集め、まとめることができる。</p>	<p>・家庭や学級、地域のよさや、課題の解決方法について考え、身近な人に説明している。</p>	<p>・自分の役割や行動の仕方を理解し、身近な人々と協力し、課題解決に向けて活動している。</p>	<p>・家庭や学級などの身近な課題について、進んで解決を図ろうとしている。</p> <p>・家庭や学級などの身近なことに関心をもち、学習を通して学んだことを、自分の生活や学級づくりに活かそうとしている。</p>

《小学校第3学年及び第4学年の評価の観点の趣旨》

知識・技能	思考・判断・表現	参画	関心・意欲・態度
<p>・家庭や学校、地域のよさや課題を理解している。</p> <p>・家庭や学校、地域の問題を解決するための情報を集め、まとめることができる。</p>	<p>・家庭や学校、地域の課題から自分たちで解決できそうな課題を選び、その解決方法を考えている。</p> <p>・選択した課題とその解決方法について、身近な人に根拠をもって説明している。</p>	<p>・自分の役割や行動の仕方についての意見を述べ、友だちや身近な人々、地域の人たちと協力し、課題解決に向けて活動している。</p>	<p>・家庭や学校、地域の課題について、進んで解決を図ろうとしている。</p> <p>・家庭や学校、地域に関心をもち、学習を通して学んだことを、よりよい生活や学校づくりに活かそうとしている。</p>

[中期]

《小学校第5学年及び第6学年、中学校第1学年の評価の観点の趣旨》

知識・技能	思考・判断・表現	参画	関心・意欲・態度
<p>・家庭や学校、地域の課題発生の原因を知り、よりよい社会のあり方を理解している。</p> <p>・家庭や学校、地域の問題を解決するための情報を適切な方法で集め、分析し、まとめることができる。</p>	<p>・家庭や学校、地域の課題から解決すべき課題を選び、その解決方法を考えている。</p> <p>・選択した課題とその解決方法を、根拠をもって地域の人などに向けて説明している。</p>	<p>・自分の役割や行動について意見を出し合い、検討して決定し、様々な人と協力し、課題解決に参画している。</p>	<p>・家庭や学校、地域の課題について、主体的に解決を図ろうとしている。</p> <p>・家庭や学校、地域に関心をもち、学習を通して学んだことを、よりよい学校やまちづくりに主体的に活かそうとしている。</p>

[後期]

《中学校第2学年及び第3学年の評価の観点の趣旨》

知識・技能	思考・判断・表現	参画	関心・意欲・態度
<p>・家庭や学校、地域・社会の課題発生の原因を知り、よりよい社会</p>	<p>・家庭や学校、地域・社会の課題から解決すべき課題を選び、その</p>	<p>・自分の役割や行動について意見を出し合い、検討して決定し、評</p>	<p>・家庭や学校、地域・社会の課題について、主体的に解決を図ろう</p>

<p>のあり方を理解している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭や学校、地域・社会の問題を解決するための情報を適切な方法で集め、分析し、まとめている。 ・自らの課題解決サイクルを身につけている。 	<p>解決方法を考えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・選択した課題とその解決方法を、根拠をもってより広い立場の人々に向けて説明している。 	<p>価しながら課題解決に向けて、参画している。</p>	<p>としている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭や学校、地域などの身近な課題だけでなく、自分と距離のある社会的な課題にも関心をもち、学習を通して学んだことを、より社会づくりや自分の生き方に活かそうとしている。
---	---	------------------------------	---

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ◎「実生活 いまとみらい科」のカリキュラムデザイン、題材、単元の開発と1～2単元実施 ◎各教科等における4つの力を育む指導方法の開発 *9年間の発達の段階に応じた、効果的な学習指導と生徒指導のあり方を研究し、段階的に実施 *国語科、算数・数学科、「実生活 いまとみらい科」における9年間のカリキュラムの整理と検討 *校区内異校種間人事交流 *児童・生徒、教職員への意識調査アンケートの作成・実施 *学力調査実施 *小・中一貫のための異学年交流の実施と検討 *第1年次研究の評価と成果・課題のまとめ（自己評価書） *第2年次のカリキュラム作成
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ◎「実生活 いまとみらい科」のカリキュラムの整理・検討・単元の開発と実施 ◎「実生活 いまとみらい科」の効果的な学びのノート（ワークシート）の開発 ◎校区の指導方法の実施と検討 *「実生活 いまとみらい科」学習指導要領の作成 *児童・生徒、保護者、教職員、地域、校区連携教育機関への意識調査アンケートの実施 *校区内異校種間人事交流 *学力調査実施 *小・中一貫のための異学年交流等の実施と検討 *第2年次中間発表会の実施 *第2年次研究の評価と成果・課題のまとめ（自己評価書） *第3年次のカリキュラム作成
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ◎「実生活 いまとみらい科」における9年間のカリキュラムの完全実施 ◎「社会参画カステップ表」の作成 *「実生活 いまとみらい科」学習指導要領の改訂 *「実生活 いまとみらい科」の教材の作成 *「実生活 いまとみらい科」と各教科の関連を図った授業の実施 *「実生活 いまとみらい科」のワークシートの修正 *「実生活 いまとみらい科」へのシンキングツールの導入 *校区内異校種間人事交流 *児童・生徒、保護者、教職員、地域、校区連携教育機関への意識調査アンケートの実施、成果検証 *学力調査実施 *小・中一貫のための異学年交流の実施と検討 *研究発表会の実施 *第3年次研究の評価と成果・課題のまとめ（最終報告書）

(3) 評価に関する取組

	評価方法等	
第1年次	①全学年の学力調査実施	・・・ 4月
	②児童・生徒，教職員向けアンケートの実施	・・・ 12月
	③自己評価書作成	・・・ 2月
第2年次	①全学年の学力調査実施	・・・ 4月
	②児童・生徒(小学校3年生以上)，教職員向けアンケートの実施	・・・ 7月
	③児童・生徒(小学校3年生以上)，教職員，保護者向けアンケートの実施	・ 12月
	④中間発表会	・・・ 1月
	⑤自己評価書作成	・・・ 2月
	⑥児童・生徒(小学校3年生以上)，教職員向けアンケートの実施	・・・ 3月
第3年次	①全学年の学力調査実施	・・・ 4月
	②児童・生徒(小学校3年生以上)向けアンケートの実施	・・・ 7月
	③研究発表会	・・・ 11月
	④自己評価書作成	・・・ 11月
	⑤児童・生徒(小学校3年生以上)，教職員，保護者向けアンケートの実施	・ 12月
	⑥最終報告書作成	・・・ 1月

5 研究開発の成果

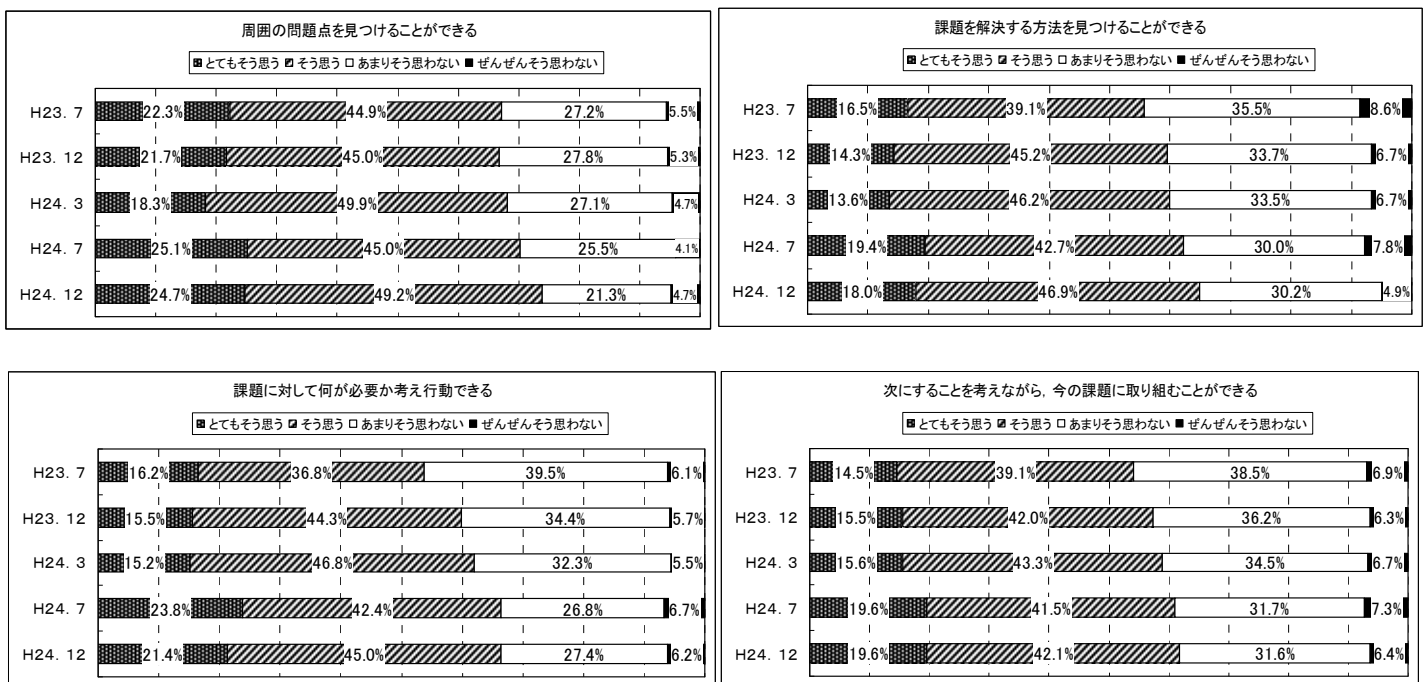
(1) 実施による効果

1. 児童・生徒への効果

効果測定の結果より

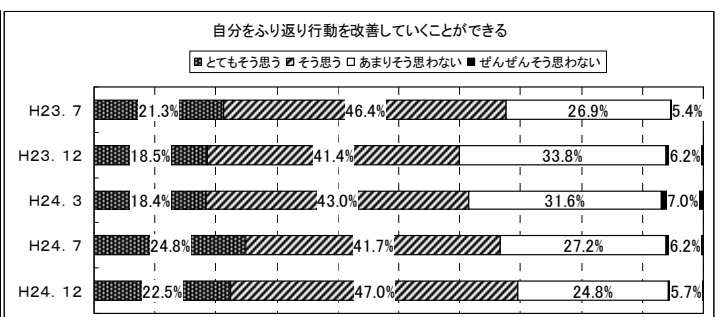
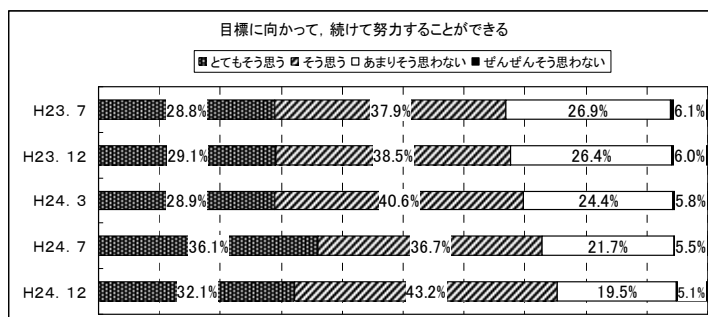
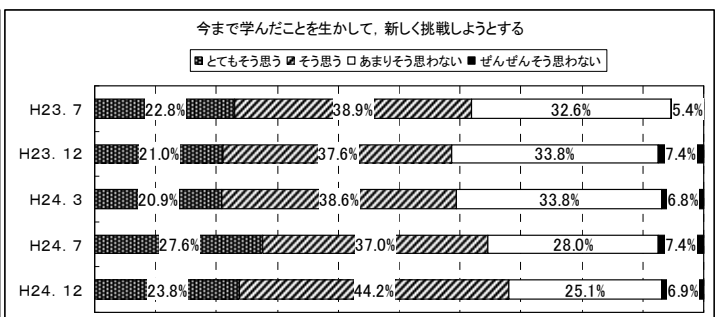
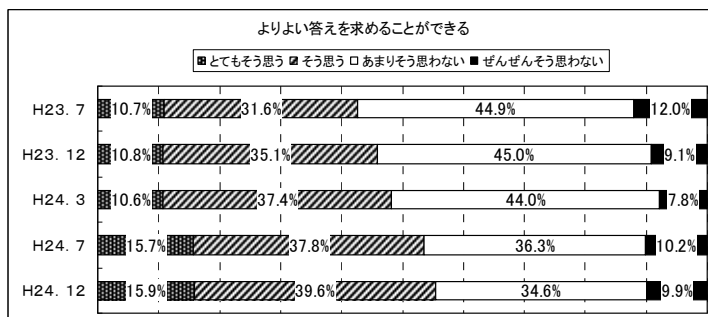
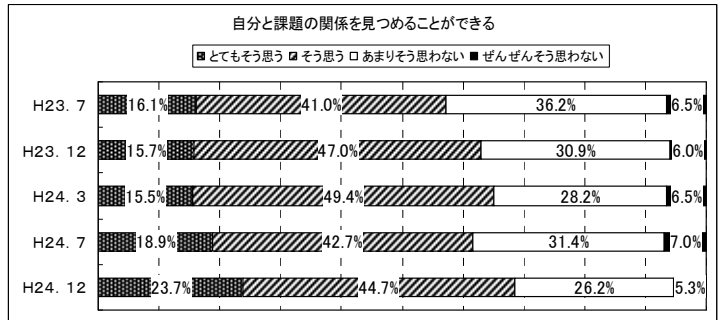
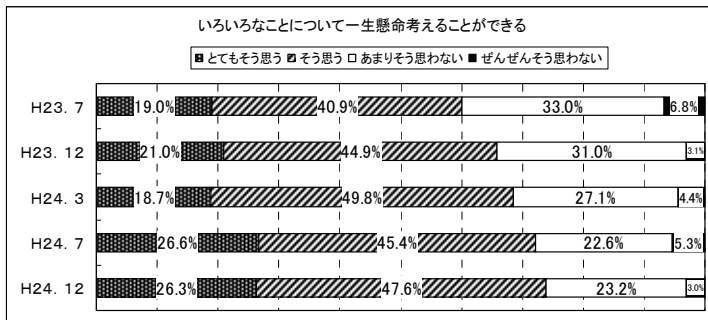
児童・生徒への効果測定は、平成23年度の7月、12月、3月と24年度7月、12月に、本校区3校の小学校3年生～中学校3年生を対象に実施した。質問項目は計33問である。以下、「実生活 いまとみらい科」学習指導要領の「目標」に沿って、子どもの力の伸びが見える項目について考察したい。

■課題を解決するために必要な知識・技能や、思考力・判断力・表現力が育まれているか



「実生活 いまとみらい科」の中で様々な事象に出会い生じた課題や疑問に対して、子どもたちは発達段階に応じた様々な方法(本やコンピュータ, アンケート, インタビュー等)を用いて調べ, 必要な内容を整理してまとめ, 課題解決に活かしてきている。また, どの学年も, どの単元でも学習サイクル「S-R-PDCA」に沿って, 授業を展開してきている。解決に困りハードルにぶつかった時には, 学習サイクルにそって解決し達成感を味わう経験を重ねることで, 課題に出会った際の解決へ向けての見通しがもちやすくなり, 「解決できるようになってきている自分」に自信をもてるようになってきていると考える。

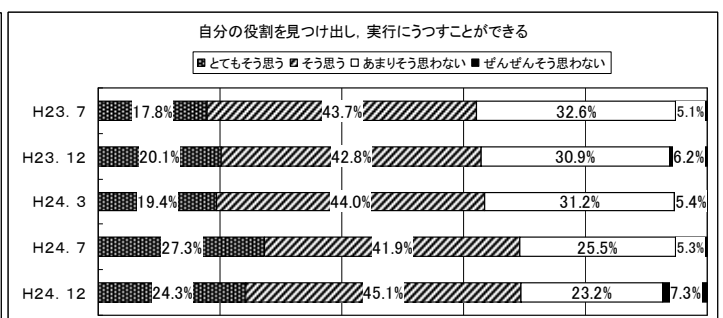
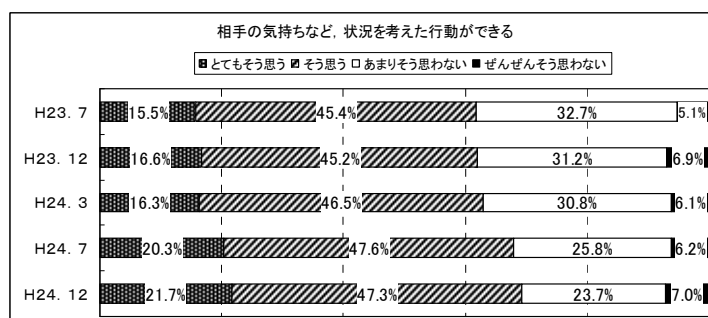
■現在及び未来の自分や社会をよりよくしていくため, 主体的・自律的に取り組む力が育まれているか



「実生活 いまとみらい科」では, 課題を第三者的にとらえるのではなく, 常に自分自身の内面に問いかけながら, 課題に向き合っていくことを重視している。課題に出会い取り組んでいく過程の中で, 絶えず「自分は…」と内面に問いかけ続ける。そして, 単元ごとに課題解決の達成感を味わうという経験をくり返す。

学習する内容は, 目標が明確であり, ゴールが見えやすい。単元の目標を1つ1つ達成していくことで, 子どもたちに自信が付き, 新たな取組への興味・関心が高まっていく。このことで, 様々な課題を自分ごととしてとらえ, より深く考え, よりよい環境を生み出していきたいという思いが強くなるのではないかと考える。

■様々な人と関わり, それぞれが自分の問題として働きかけることができる力が育まれているか



「実生活 いまとみらい科」では、学級・学年の友だちだけでなく、下級生や上級生、校内の職員、保護者、役所の方、地域の方など様々な人と出会う。日常生活の中だけでは出会えない人たちと話したり、共に考え、共に課題の解決に向けて取り組んだりすることで、様々な年齢の相手の思いを感じとり、自分自身の役割を考え、互いができることを分担する場面が必然的に多くなる。そのような中で自己の有用感を感じ、行動に移すことができるようになってきていると感じる。

児童・生徒の姿から

「実生活 いまとみらい科」の取組を通じて育まれた達成感等が子どもたちに様々な影響を与えている。自信がもてず、自分を表現するのが苦手であったある子どもは、グループのメンバーに意見を伝えるようになり、いろいろなことに積極的に関わり、友だちと一緒に挑戦することを楽しむようになってきた。

その他にも、応援団の団長に立候補したり、DJに挑戦したり、「やってみたい」という気持ちを、一歩進んで形に表す子どもの姿が見られるようになってきた。

また、授業がきっかけとなり、まちのフェスティバルで自分たちの取組を発表したり、夏祭りに参加して募金活動をしたり、校区の幼稚園の運動会のお手伝いをしたりと地域に働きかける子どもも増えている。

学習面では、自分の考えを最後まで粘り強く書こうという姿勢が、多くの子どもたちに見られるようになってきている。

2. 教師への効果

本校区では、研究の1年次より、校区で集まる機会を何度ももってきた。この3年間で、校区の子どもたちの理解、課題の共有が進み、教職員の「校区全体でチームとして子どもたちの教育を担う」という意識は強くなった。

学年や学校を越えて協力体制をとり、異年齢・異校種へのアプローチを試みるなど、校区の連携を生かした数々の授業を実施するようになってきている。特に、小学校どうしの連携が進み、2小学校の交流授業、合同授業を実施することも多い。また、生活指導担当者が中心となり、子どもへの対応が異なる小学校と中学校が共通して利用できる、生活指導の手引きも作成した。

3年間の研究の中で、9年間を貫く「実生活 いまとみらい科」のカリキュラムと「社会参画力のステップ表」を作成することができた。小中学校9年間のどの段階でどのような力をつけなければならないのか、自分たちが現在指導していることはどのような取組が土台になっているのか、次にどのようにつながっていくのかということが明確になり、9年間のつながりを意識して指導できるようになってきた。

「実生活 いまとみらい科」の実施は、他の教科の授業改善への意識向上、行事の活性化等にもつながっている。取り組む中で浮かび上がってきた子どもたちの課題、「聴いたり話したりする力の弱さ」の解決を意識して各教科の授業を展開することや、「実生活 いまとみらい科」を他の教科と関連づけることなど、「実生活 いまとみらい科」が他の教科に、他の教科が「実生活 いまとみらい科」に、と双方向に影響が及んでいる。課題解決に向けて、小中一貫した「聴き方・話し方」の指導レベル表づくりも3校で取り組んだ。

また、3校の学校行事の見直しを進めることもできた。今まで以上に子どもたちの主体性を引き出す機会とするために、校外学習や体育祭(運動会)など、できる限り、子どもたちに企画段階から関わらせたり、役割を担わせたりすることを意識した取組をしている。

3. 保護者等への効果

保護者・地域から

「実生活 いまとみらい科」では、保護者や地域の方にゲストティーチャーとして来ていただいたり、子どもが地域に出て活動したりと、子どもの姿を見ていただく機会が多い。子どもたちが前向きに取り組む姿を見て、「こんな取組をしてくれてうれしい」と評価していただくようになり、積極的にお力添えく

ださる方も増えている。ゲストティーチャーの方に、「自分が子どもの時にもこんな授業があったらよかったのに。」と仰っていただいたこともある。

保護者からは、「子どもが家でねばって考えている姿を初めて見た」「声が大きくなった」「積極的になった」「授業で取り組んだことを家でも続けてくれている」など、子どもの成長を喜ぶ声を聞いている。

また、地域のイベントやフォーラムに誘ってくださるなど、子どもたちの活動の場が広がっている。地域情報誌による活動の様子を紹介、子どもたち発案のパフェの商品化・販売、子どもたちが考えたキャラクターの商店での活用など、地域の方にもいろいろなご協力をいただいている。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

1. 研究の成果を継承し、発展させること

- ①「実生活 いまとみらい科」の教材の精選 校区で作成したカリキュラムが、子どもの発達段階に応じた適切な内容であったか再度見直し、精選、修正していく必要がある。また、授業で使用するシンキングツールやワークシートについても、よりよいものとなるように見直していかなければならない。
- ②「実生活 いまとみらい科」と他の教科との関連づけ 社会参画力の育成を図る授業を展開していく上で、社会科等の学習と関連させていくことは重要である。また、子どもたちに様々な表現方法を獲得させるためにも、国語科等と連携していく必要がある。
- ③授業改善の取組 今年度実施の「大阪府学力・学習状況調査」において、本校区の中学3年生は、国語・数学ともに、「主として知識」を問うA問題、「主として活用力」を問うB問題のいずれも大阪府や高槻市の平均を上回る結果を出している。しかし、設定された条件に従って説明することなどには課題が残っている。日ごろの授業やさまざまな場面で、条件を設定して文章の記述や口頭での説明をさせたり、グラフや図などの非連続型テキストの読解を意図的に組み入れたりすることによって、論理的に思考する力をつけていきたい。
また、子どもが主体的に学べるように、各教科で「ソロタイムⅠ（個）→コミュニケーションタイム（集団）→ソロタイムⅡ（個）」の授業スタイルを取り入れていくことや、学習サイクル「S-R-PDCA」に沿った展開で課題解決を図る内容にしていくこと等をさらに追究し、日々の授業にもっと工夫を凝らし、改善していきたい。
- ④「社会参画力ステップ表」の見直し 9年間を通しての「社会参画力ステップ表」を作成した。子どもの発達段階に沿った適切な内容であったか見直し、修正をしていく必要がある。
- ⑤言語力の育成 この研究を通して浮かび上がってきたのは、校区の子どもたちの言語力の低さである。校区として「聴く・話すステップ表」を作成し、様々な場面で子どもたちに意識させるなど、言語力の育成に努めてきた。さらに、取組を進めていきたい。
- ⑥子どもの主体性を活かした学校づくり 「実生活 いまとみらい科」を活かし、校外学習や体育祭（運動会）改革、児童会・生徒会の交流などに取り組んできた。さらに、子どもの主体性を活かす学校づくりを進めていきたい。

2. 校区の連携・協力体制を継続していくこと

「研究を推進する組織づくり」「3校共通の年間行事予定表作成」「事務局会議の定例化」「ニュースの発行」など、3校での研究を推進していくための“システム”と“サイクル”を充実させ、「子ども理解」「内容」「学び方」の一貫を図る、連携型小中一貫教育をさらに推進していきたい。

3. 保護者・地域との連携の強化

子どもたちに社会参画力を育むためには、保護者や地域の協力が欠かせない。校区の取組を積極的に発信していくとともに、外部の人材の活用や社会参画の場をつくることを通して、保護者や地域との連携を強化していきたい。